ゼロと転生と人修羅と。

鞍馬天狗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロと転生と人修羅と。

【Ｎコード】
Ｎ７５８７Ｏ

【作者名】
鞍馬天狗

【あらすじ】
この話は人修羅が新たに作り出した世界と、その世界に生きる人々（ゼロ魔の人々）とのお話です。

なんせ構想５分ですので、プロットも何もありません。ストックもありませんし何の計画性もありません。凄い不定期になる事間違いありません。この話は元々私の書いているもう一つの作品が最近スランプ気味で気分転換にテキトーに書いたものだからです。一応三人称の練習という意味合いも持っていますが、一人称もたまに気

分で入れたりしてるので（最初の方）大分読みずらいかと思います。
それでもいい方はお進みください。

プロローグ

何でこんな事になってしまったのだろうか。俺はそんな事を世界が作り変えられていく瞬間を眺めながら思った。

親友を殺し、彼らの思想を踏みにじり、だと言うのに自分は何の理も持たず。そんな優柔不断な考えのままカグツチを倒してしまった。

本当に良かったのだろうか。このままではかつての世界に戻るだろう。だが、それでは親友と戦った今までは無意味だったと言うのだろうか。お互いに憎しみあって、苦しみあって、傷つけあって。

俺はふと空を見上げた。空が崩壊していく。今はこの世界を崩す段階。まだ世界は創世されていない。

最後のチャンスだと思った。

俺の今までの辛い記憶を意味のあるものにするのか、それとも塵屑に変えてしまうのか。今、この分解されていく世界は、自分の考えたとおりの世界になるのだ。

俺は人修羅。

醜い争いと果てしのない闘いを通して出来上がった醜い悪魔。人の幸福を与える事はできず、ただ破壊をもたらすだけの存在。

ふっ…と無意識に哂いが漏れた。今自分が望んだのは、争いの無い世界。

こんな自分がそんな世界を作れるはずが無い。

「だけど…」

俺は作りたい、平和な世界を。

――そうして俺は世界を作り変えた――

1―1

―1―

私はふと空を見上げた。そして鬱蒼と茂る木々の間からこぼれる淡い光に頬を緩ませる。

私はこの森が好きだ。数人の子供達と、優しい姉の居るこの森が。姉は私達の為にやっている仕事のせいでたまにしか帰ってこないけれど、それでも暇を取っては私の顔を見に来て、優しく微笑みかけてくれる。

子供達は、元気に走り回って私に笑顔をくれる。そんな子の村、ウエストウッド村を私は愛してるのだ。

そうして今日も街から買ってきた食材を手に持って私は自分の家の扉を開いた。

「おかえりっ！　おねえちゃん！」

そういいながら寄ってくる子供達に、今日のご飯はシチューだと言う事を告げる。飛び跳ねて喜ぶ子供達を尻目に、私は一服する為に紅茶を入れる。

そして、子供達と茶菓子を食べながら、思う。

こんな幸せがずっと続きますように――と。

―2―

その日は不気味なほど静かな夜だった。空に浮かぶ満月はくれないに染まり、ハーフエルフの少女ティファニア・ウエストウッドはそんな空を見上げて何処かどうしようもない不安を心に抱いた。

――嫌な夜…

ティファニアはそんな言葉を無理矢理のどの奥に押し止め、もう既に寝てしまった子供達に習って自分も寝る事にした。

深夜。ティファニアは寝苦しそうに汗をかきながら眠っていた。外の風景はまるで静止画のように静寂を放っていた。

――――コ――ェ――ェェェ――

「っ！？」

本来なら響いてくる野犬や幻獣などの遠吠えも全く聞こえないそんな夜に、彼女は何度目かわからない地獄から響いてくるかのような声にティファニアは飛び起きた。首筋や額の汗の玉がスーッと流れ落ちる。

「なんなの、もう…」

ティファニアはそう呟きながら、汗ばんだ自分を紅の月光で確認し体を拭く為に起き上がった。

嫌な夢ね、と心の中で呟きながらベッドの横にある箪笥を開け、白いタオルを取り出す。
そして体を拭きながらふと思う。

はて、このタオルはこんなに赤かっただろうかと。しかし、そういえば今日は月が紅かったことを思い出す。

「え…？」

ティファニアは一瞬硬直し、それから何かに恐怖するように振り返った。

「な、何で……？」

そもそもこのハルケギニアではガラスの窓を付けている家など貴族の家だけなもので、平民や貧乏な貴族の家では専ら木製の両開きの窓であった。勿論ティファニアの家もその例に漏れない。無論木製の窓を月光がすり抜ける等という事はまずありえない。

つまり結論を言えばそこには窓が全開になっていると言う事であった。

ティファニアは床に入る前のあの言いようの無い不安を再度感じ、急いで棚の上においてあったタクトを手に持った。

この時間に子供達が起き出してこんな悪戯をするはずもないし、自然に開いたというのも考えずらい。無論寝る前にはちゃんと木のつっかえ棒を嵌めた筈だった。消去法で言えば残る選択肢は一つである。

「誰！？　居るなら出てきなさい！」

ティファニアはタクトを握る右手が震えるのを左手で必死に押さえながら居るであろう『盗賊』に問いかける。

しかし予想と反して何の反応もない事にティファニアはますます不気味さを感じていく。このままじっとしていてもしょうがないと思った彼女は、サンダルから靴に履き替え窓から外に出た。

辺りは静寂だった。そもそも彼女はこんな勇敢な性格ではない。幽霊や盗賊などに恐怖する普通の少女なのだ。彼女がどれだけの勇気を持って此処に出た事だろうか。でも彼女には勇敢にならなければならない理由――子供達が居たからそれでも彼女は奮い立つのだ。

彼女はどちらかと言えば天然、有り体に言えばどんくさい。そんな彼女が見せたのは普段の彼女には考えられないような機敏な動きだった。

「……！」

ふと背後にティファニアは気配を感じ、後ろを振り向いたのだ。勿論その手に握られる杖（タクト）は油断無く視線の先を捉えている。そして彼女は振り返った事を後悔した。それは見てはならないものだった。

盗賊なんて生易しいものなんかではない。

幽霊なんていう軽いものでもない。

そこにいたのは紛れも無い『悪魔』だった――

1―2

暖かい。

この真っ赤な場所。大量のマガツヒが禍つ霊が体を満たす場所。かつて世界を作り直してから自ら眠りについた場所。俺の意識は覚醒しだしていた。

最初はただ平和に過ごすことが嬉しかった。体を休める時に敵の奇襲を警戒する必要も無く、敵を殺す為の策を練る必要も無く、ただただ小鳥やリスなどの動物達と戯れてすごす日々。たまに、寂しくなれば俺の心に宿る１２体の仲魔達を召喚して話し相手になってもらう。そんな事を何千年と続けていた。いや何万年も…だろうか。

寿命という概念が無くなって、一回眠りにつけば千年寝たままなんて当たり前だったからだろう、もうどれほど月日が立ったのかなんて分かるはずも無かった。

ただ、猿と言う個体が人間へと昇華していたことから考えればもしかしたら何億年かも知れない。

そんな遥かな時を過ごして久しぶりに起きた世界で出逢ったのがブリミルと言う男だった。

彼は俺に言った。我々人間は他の動物に比べてあまりのも非力である。このままでは人間は絶滅してしまうと。

かつて俺が生きていた世界では人間は地上の覇者となっていた。

しかしこの新しい世界は全てが違っていたのだ。

世界に満ちるマガツヒというエネルギーによってあらゆる生き物は変化しその体に魔力と言うものを宿していった。しかし人間に与えられたのは他の生物より『比較的』優秀な頭脳というものだけであった。この世界では人間と同等の頭脳を持ち、且つ精霊を操る『エルフ』、そして同じように精霊を操れ、エルフのように器用さは無いが同等の頭脳を有する『竜』が世界の覇者であって人間はただの塵屑でしかなかったのだ。

ブリミルは俺に懇願した。何かを虐げる能力は要らないただ守る力が欲しいと。

確かにその時、エルフの二百五十万、竜の九十万という数に対して人間と言う個体は1万ほどにまで減少していた。俺は迷った。此処で人間に力を与えるべきなのかと。しかし確かに『エルフ』と『竜』は強大であった。だから俺は言った。ならばせめて人間が自衛できるぐらいの力を与えてみようと。その時俺はかつての自分の種族だった人間に少なからず未練があったのかもしれない。

俺は彼にマガツヒを分け与え、強制的にマガツヒの廻る回路を生み出した。ブリミルにしてやったのはそれだけだ。俺はその時、マガツヒを使えるようになって簡単な魔法が使えるようになる程度の予想だったのだ。しかしブリミルは天才だった。そして俺自身がマガツヒを与えると言う事の意味をわかっていなかったのだ俺は。

彼は万能属性に目覚めてしまった。一番最初に使った技は『メギド』。彼は嬉しそうにそれを『エクスプロージョン』と名付けていた。

そこからは加速度的に色々な技を手に入れていった。

発動に時間は掛かるが一回で四回分の『スクカジャ』を掛ける『加速』を作り出し、反射する事までは出来なかったが無効化にまで出来るようになった劣化版『マカラカーン』の『ディスペル』、そして敵に幻影を見せるアレンジ版『原色の舞踏』の『イリュージョン』などを再現し、挙句の果てには世界をつなげる『ワールドドア』等のオリジナルの魔法まで作り出してしまったのだ。そして何よりルーンと言うものを作り出したのには流石に危機感を持ったものだ。

だが彼は俺に約束してくれた。私はこの力を悪用しないと。

そして俺はまた眠りにつき、そして今目覚めようとしている――

―1―

特徴的な黄金の仮面に青と白の首周りにピンクの肌のそれは、かつてのボルテクス界において『幽鬼ヤカー』と呼ばれる正真正銘の『悪魔』だった。

1，3メイルほどの小柄な体に似合わないほどの凄まじい威圧感を放つそれに、ティファニア・ウエストウッドは気絶しそうになる自分の意識を繋ぎ止める事に必死だった。手は見た瞬間から休む暇も無く震え続け、そのくせ足や視線はまるで鉄になってしまったかのように固まっていた。

その時彼女の脳裏にあったのは明確な『死』と言う形象だけであった。

「ぁ……あぁ…」

もしかしたら話が通じるかもしれないそんなありえない希望を抱いて言葉を発しようとするが今まで苦も無く使えた喉も今は役に立たない。

どうすれば自分は此処から生き延びれるのか。

どうすればあの可愛い子供達を守る事が出来るのか。

頭の中に幾千もの思考が怒涛のように押し寄せる。ティファニアは、ああ、これが走馬灯なのだろうか、と何処か逃避めいた思考をしていた。

しかし、そんな彼女の現実逃避も終わりを告げた。

目の前の悪魔が動き出したからである。その事に気づきビクッと体を硬直させ、今まで無意識的に視界から忘れ去っていた悪魔を見据える。

するとヤカーは両手を天に向け何やら不思議な踊りをし始めたところだった。その瞬間ティファニアはどうしようもない危機感を感じ、転げる様にして斜め前に飛び込んだ。と同時に起きる轟音と閃光。恐る恐る後ろを振り向けば自分の後ろの木々が黒焦げに炭化していた。無意識に目を下に落とせば後数サント内側だったら自分もあの木々と同じ運命であった事が、境界線のように自分の足の僅か数サント後ろの雑草が黒く焦げている事が物語っていた。

1―3

―3―

真夜中。虫の鳴き声さえ聞こえない無音の森でティファニアは走っていた。

後ろを見ればあの怪物が僅か１０メートル後ろを追いかけてくる。ティファニアは必死だった、子供達を守る為に。

どうやらヤカーはティファニア一人に目標を絞ったようで子供達の居る小屋には少しの興味も持たずただ彼女を追ってきていた。

これは彼女にとって子供達を守る事に関して言えば何とも幸運な事だった。無論彼女の危険は増すし、自分を殺した後子供達の元に向かわないなんて保証は無い。

それでもティファニアは走った。唯一つの希望、この森に伝わる守り神様の祭られた場所、シェルティーカを目指して。

人修羅。

かつてのボルテクス界においてそう呼称された悪魔がいた。彼はその世界を破壊し今の世界を作り上げた。しかしその事を知る物はこの世界には居ない。かつてブリミルと言う男が居たが今はもう死んでしまっている。そんな彼が創世後自らの寝床とした場所があった、それはかつて自分の住んでいた世界をモチーフにした和風の寺

院であり、その場所の名前を『修羅塚』といった。

眠りが浅い。人修羅たる青年はそう感じた。もう意識は徐々に覚醒し、もう直ぐ自分が覚醒する事を彼は感じ取っていたのだ。

人修羅はこの紅の空間でふと思い出す。そういえば人間どもはどうなったのかと、ブリミルと彼ら人間達はエルフや竜…確かブリミルは韻竜と呼んでいたあれらから生存権を手に入れられたのかと。

そして世界は平和だろうかと。

ティファニアは目的地が視界に入った事に頬を緩ませた。

このハルケギニアにはブリミル教と言うのが一般的であるが、その聖典にブリミルが倒した『悪魔』のヒュテシェルの一説が記録されている。ヒュテシェルは強大な力を持っていたがブリミルの神の威光の前に穢れをはらわれ、以降絶対の忠誠を誓ったという。そしてアルビオンの伝説ではヒュテシェルはブリミルの死後アルビオンに光臨し、アルビオンをその頃未だ存在していた数々の国々から守る為空中へ浮遊させたと言う伝説があった。

色々と穴だらけで不可解な点も多いアルビオンの伝説だが、アルビオンでは一般的で、ロマリア宗教庁もこれを容認していた。

そして特に信仰度が高いアルビオンにその神殿が集まるのは当然でハルケギニア中の神殿の数の８割を占めていた。そしてその神殿の殆どが煌びやかな装飾を使った豪華な石造りの神殿であった。

しかしそんな中一つだけ異様な外観の神殿があった。それがティファニアの向かっていたシェルティーカであった。木造で、神殿には似ても似つかず、大きさも大した大きさではない。ヒュテシシェル伝説の浸透したアルビオンでも…否、だからこそ、このみすぼらしい建物を誰もヒュテシェルの神殿とは気がつかなかった。

無論ティファニアもそれを知っているわけではない、ただその場所は何故か幻獣たちや猛獣達が近づくと何か恐怖するように逃げていくのである。此処には守り神がいる。この辺りの土地の民には言われていた。

実際ティファニアもその場所に行くたび何処か知れない威圧感を感じていた。だからこそもしかしたらあの化け物にも効果があるかもしれないと考えたのであった。

ようやく目的の建物の前にたどり着いたティファニアは乱れた息を整える事も時間が惜しいと言うようにぱっと振り返り油断無く杖を『敵』に向けた。

自分が使える魔法は忘却と言う記憶を操作する魔法だけ。それが目の前に今も迫りくる怪物に聞くかどうかなど分からない。呪文を発動するには時間が掛かるし、その間自分は無防備になる。もし効かなかったら自分は容赦無く殺されるだろう。そんな博打は打てなかった。

走って近づいてきた怪物が徐々に速度を落としやがて彼女の3メイルほど手間へで停止した。

「効果があったの……？」

思わず安堵の吐息と共にティファニアはそんな言葉を吐き出した。だがそれは儚い泡となって消えた。

「そ、そんな…なんで？」

――ヨコセェェ

――マァガツヒィィィ

目の前の怪物はそんなくぐもった声を発すると何かに抵抗するようなそぶりを見せながら一歩、また一歩と近づいてきたのである。ティファニアもヤカーの動きにあわせて後ろに後退る。しかしやがて終わりは来るわけで、彼女は建物の中へと続く階段に足を取られ後ろに倒れこんだ。

そして上を見上げればそこには黄金の仮面が晒っていた。

「あっ――」

鮮血――

紅の月光を反射して朱色に輝く金髪の髪に血液とマガツヒが飛び散り朱から赤に染め上げていく。ティファニアは自分の腹部に深々と刺さった爪と目の前の仮面を見ながら呆然とした表情を浮かべていた。

何が起きているのか。何故自分はこんなところにいて、ピンクの何かに腹を刺されているのか。

不意に涙が流れ落ちた。

「…マチ…ル…ねえさ……」

それを最後にティファニアはその生の活動を停止した――

１―３（後書き）

やってしまった。俺が寝る前に考えた妄想をついに出してしまったｗ

話は変わるが最近、Ｒｅｂｉｒｔｈ　ｔｈｅ　ｅｄｇｅにはまり、曲を練習中。ブリッジミュートのフレーズだけ未だに上手く出来ない。ガッデム。

1―4

―4―

――紅い

彼が目覚めて最初に思った事はそれだった。まず空を見上げれば月が煌々と紅く輝き、そして空中を舞うマガツヒと血がアクセントを加えその光景は何とも幻想的な光景となって彼の瞳に写っていた。

人修羅は目の前を見据える。そこにいたのはかつて何度も殺してきた悪魔、幽鬼ヤカーと金髪の少女の死体であった。

何故此処にヤカーなんてものがいるのだろうか。彼はそんな事を思考した。かつて人間であった頃、目の前にある人の死骸など見たものなら発狂してしまっただろうが、今の彼には何も感じなかった。それは普段人が虫の死骸を見てああ、死んでるなと感じることと同様のことで、至極当然の事だったのだ。

むしろ今の彼の専らの興味は目の前に居る『雑魚』の存在であった。値に表せば彼の能力値は限界にまで達している。そんな彼からしたら目の前の存在は足元をうろつく『蟻』程度の存在であったが、本来ならそこに居るはず無いそれは彼にとって大きな興味を持たせたのだ。

「何故此処に居る」

そんな言葉を目の前で首を傾げるような仕草をしている物体に話し掛けた。しかしヤカーは幽鬼の種族である。話が通じるはずも無

い。

彼は、その事を思い出すと右手を額の前にかざし用は無いとばかりに右手を突き出し、それと同時に呪文を唱える。

――アギダイン！

人修羅がその言葉を言い放つとそれは力のある言葉として世界に具現化する。焔を表すその言霊はその名を体現するように巨大な火の玉を作り出しそして『蟻』に殺到した。

轟音と肌の焼けるような熱が辺りを襲う。

瞬間、僅かなマガツヒを撒き散らしてヤカーは断末魔の叫びも残さないまま蒸発した。

目の前の物体が消えてなくなった事を見届けた人修羅は数段の階段を下りて金髪の少女の前に向かう。

「これなら知っているだろうか」

視線の先にある『これ』を見ながら誰にでもなくそんな言葉を呟いた。今彼には自分の疑問を晴らす事が第一の優先事項だったのだ。

しかし目の前の死体から聞くという事は生き返らせるということである。サマリカームを使える仲間は居るが、召喚するのは面倒くさい。かといって道反玉をこんな物のために使うのも勿体無い気がするのだ。

しばらく思案した彼だったが、数多くある道反玉を一つ消費した

ところで自分には何の苦にも成り得ないと言う結論に達し、結局目の前の人間らしきものから事情を聞く事を決心した。

彼はおもむろに右手を上げると空間の裂け目――宝物庫に腕を入れた。そして目的のそれを取り出すと死体の頭上で握り潰す。

とたん、砕け散った道反玉は光の粒となって死体に降り注ぐ。光の粒を掛けられた死体は体全体を徐々に発光させ、一際大きな光を出して消えた。するとどうだろう、そこには大方の傷の消えたティファニアが横たわっていた。

しかし、道反玉では生き返らせる事は出来ても完全に治療はできない為、大分顔色は悪く意識は戻っていなかった。気絶していては話を聞く事も出来ないため彼はしょうがなく自分の持つ魔法を発動させる。

一言『メディアラハン』そう呟くと一寸後には掠り傷から、かつて怪我をして残ってしまっていた古傷まで全てが回帰してく。

そうしてティファニアは死から生還した。

―5―

彼女が目を覚ますとそこには不気味な緑に輝く刺青を全身に入れた青年がいた。最初彼女は何で自分の部屋に見知らぬ男性が居るのだろうと驚愕し慌てて体を起こした。しかしよくよく考えれば自分は謎の怪物に追いかけられ、この場所に逃げてきて、そして――

――そして腹を貫かれて『死んだ』はずだ。

そこまで考えて彼女は慌てて自分の腹に目をむけ、触って確かめてみる。

「な…んで？」

しかしそこに傷は存在しなかった。アレは夢だったのだろうかと彼女は考えた。しかし、ならば自分が此処に居る意味が分からない。やはり現実だったのだろうか。では何故自分は生きているのか。

そんな無限ループの思考に入ったとき、今まで沈黙を保っていた青年が口を開いた。

「何故、ヤカーが居た」

「！？」

今まで忘れていた青年に突然話しかけられビクッと反応しながら彼女は上を見上げる。

「ヤカー…ですか？」

「お前を殺したものだ」

『殺した』と言う表現にティファニアは違和感を覚えた。彼女の中で燻る嫌な予感を必死に胸の奥に仕舞い込みながら訊ねる。

「殺した……と言うのはどういうこと…ですか」

「そのままの意味だ。お前はヤカーによって殺されたと言う事だ」

「じゃあ、私は幽霊なんですか！？」

「そんなわけあるか。お前は俺が生き返らしてやったんだ」

「そ、そんな事が出来るわけ――」

「できるんだよ。なんたって俺は、神…だからな」

ティファニアの言葉を遮って人修羅はそう自傷気味に呟くとまだ何か言いたそうなティファニアに、手のひらを彼女の顔の前に出す事によって止めさせる。このとき人修羅には彼女にいちいち説明してやる気など無く、あまりに煩いようなら事情を聞きだした後に殺してしまってもいいかもしれないと、そんな事さえ考えていたのだから。

「――お前には色々と聞きたい事がある」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7587o/

ゼロと転生と人修羅と。

2010年11月15日02時39分発行